

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02228

研究課題名(和文)万葉語彙の語誌的研究

研究課題名(英文)A study of vocabulary of "Manyo-Shu" from the viewpoint of etymology

研究代表者

多田 一臣 (TADA, KAZUOMI)

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：50092268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『万葉集』の語彙を語誌的な考察を中心とし、新たな『万葉集辞典』の刊行を目指すところにあった。この三年間の研究成果として、多田一臣『万葉集全解』のテキストデータ化を完了したこと。これを利用した共同討議の場を設け、その語彙の検討を進めたこと。柿本人麻呂の語彙研究を始発とし、その作品世界の全貌を闡明にした『柿本人麻呂』(吉川弘文館)を刊行したこと。同じく、高橋虫麻呂・山部赤人の語彙研究を基本とした『高橋虫麻呂・山部赤人』(笠間書院)を完成させたこと。『万葉集』の語彙との比較から進めた『古事記』の歌謡研究を、『古事記』全体の評釈に結実させ、その完成をほぼ見たことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：I studied vocabulary of "Manyoshu" from the view point of etymology and in this study, aimed at making "Manyoshu waka collection dictionary" in the near future.

The results of research of these three years are four of the nexts.

I completed the text data of Kazuomi Tada "Manyoshu zenkai". In addition, I established the collaborative place using this text data and pushed forward a study of the vocabulary of "Manyoshu".

I published "Kakinomoto no Hitomaro(by Yoshikawa Kobunkan)". In this book, I clarified the total perspective of his works from the view point of a study of the vocabulary of waka poem of Hitomaro. I completed "Takahashi no Mushimaro and Yamabe no Akahito (in preparation by Kasama shoin)" likewise. In this book, I pushed forward a study to a clue with the vocabulary of the poet of these two.

I pushed forward the study of the songs and ballads of "Kojiki" as extension of the studies of "Manyoshu". Furthermore, I almost completed the exegesis of "Kojiki".

研究分野：日本古代文学

キーワード：万葉集 万葉語彙 万葉語誌 柿本人麻呂 高橋虫麻呂 山部赤人 古事記

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成22年度～24年度年度科学研究費基盤研究(C)に採択された研究「万葉語彙の表現論的研究」の成果を受け継ぐものである。平成22年、研究代表者は、『万葉集』の全訳注である『万葉集全解』全7巻を完成させたが、その執筆過程で痛感したのは、『万葉集』の和歌の一つ一つの言葉を支える世界像(世界観)を考えることなしには、その表現のしくみを解き明かすことはできないということだった。そこから、『万葉集』の語彙を、語誌的な立場から明らかにすることを考えた。『万葉集』の語彙研究は、これまでは上代語(古代語)一般の中で、しかも国語学の研究者を中心に進められてきた。『時代別国語大辞典 上代編』や『岩波古語辞典』の語誌的な説明は、そのすぐれた達成を示している。とはいえ、それらは限られたスペースの中での記述であり、また上代語(古代語)一般の中での説明でもあるため、そこに示された理解が必ずしも『万葉集』に密着したものとはなっていない憾みもある。このような意味から、私は新たな『万葉集辞典』の構想がなされるべきだと考え、本研究をその基礎作業として行うこととした。以上が、研究当初の背景になる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新たな視点に立って、『万葉集』の語彙を表現論的な視点から考察し、将来的には『万葉集辞典』の作成を目指すための基礎を確立するところにある。本研究では、とりわけ語誌的研究の視点に立って、万葉語彙の考察を続けることを、当面の目的とするが、同時に、万葉語彙の独自性を浮き彫りにするために、『古事記』の歌謡との比較、さらには、『万葉集』内部の語彙の偏在を確認するため、柿本人麻呂、高橋虫麻呂、山部赤人、山上憶良の語彙を通じた作品分析を試みることも目的とした。

それによって、『万葉集』の表現世界のありようを闡明することができるかと信じたからにはほかならない。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者の『万葉集』の注釈書である『万葉集全解』のテキストデータの整備を行い、そのデータをもとに、有志による研究会を組織し、共同討議を重ねながら、重要な語彙についての語誌的検討を進めた。『万葉集全解』のテキストデータは、簡便なものをすでに作成してあるが、今回はそれをさらに補訂し、語彙の検索に充分資することができるようにした。このデータを、共同討議の有志にも配布することで、有益な討議ができるようになった。なお、『万葉集全解』の著作権・著作権の問題があるため、このデータは一般には公開しない。この共同討議で得られた成果は、『万葉集辞典』作成の際の大きな礎となるはずである。なお、この有志による研究会は、現在も継続中であることを付言しておく。

(2) 以下は、研究代表者の単独の研究となるが、(1)を進めるとともに、柿本人麻呂・高橋虫麻呂・山部赤人・山上憶良の和歌を、表現史的視点によって分析し、『万葉集』全体の中で、その表現がどのような偏差をもって現れているかについての検討を仔細に行った。具体的な作品分析を中心としたが、とくに柿本人麻呂、高橋虫麻呂・山部赤人については、研究書の執筆を書肆から求められており、上記のような検討を踏まえた研究を推し進めた。山上憶良については、やはり作品分析を中心とした。憶良の場合は、独自の語彙の使用が顕著であり、その丹念な分析を通じて、他の万葉歌人から大きく隔たりをもつ憶良の作品世界に迫ることを目指した。この成果もまた、歌誌『磔』から連載を依頼されている憶良論の中に反映させた。表現史的の基礎には語誌的な分析が必須であり、この意

味で(1)と(2)は互いに連動した研究となる。

(3)『万葉集』の語彙研究を進めるに際して、同じ韻文でありつつも、『万葉集』とは異なる位相をもつ『古事記』の歌謡についても、これまた語誌的な分析を中心とする表現史的な研究を同時に行った。その理由は、これも『万葉集』の語彙との偏差を明らかにし、それによって『万葉集』語彙の独自性を明らかにするためである。ところが、『古事記』の歌謡の分析は、歌謡のみを対象とするだけでは不十分である。それゆえ、歌謡をそれを含む本文(地の文)とあわせて詳細に考察する必要がある。そこで、ここでは、歌謡のみならず、『古事記』全体の新たな注釈ないし評釈を作成することを、新たな目標に据え直した。もとより、これも『古事記』の研究であると同時に、最終目標である『万葉集辞典』完成に至り着くための基礎作業であることは言を俟たない。

4. 研究成果

この三年間の研究成果として、以下の五点を挙げるができる。

(1)多田一臣『万葉集全解』のテキストデータ化を完了したこと。これを利用した共同討議の場を設け、その語彙の検討を進めたこと。これは上記「研究の方法」で記したことが、現在もなお共同討議は継続中であり、これによって新たな『万葉集辞典』の基礎を固めつつあることが、その成果として挙げられるが、まだその公表には至っていない。

(2)柿本人麻呂の語彙研究を始発とし、その作品世界の全貌を闡明にした『柿本人麻呂』(人物叢書、吉川弘文館)を刊行したこと。これも、上記「研究の方法」にその経緯を記したとおりだが、この書では柿本人麻呂の伝記研究を軸に、その作品分析を徹底して行った。その分析には、繰り返すように、語誌的あるいは表現史的な視点に立つ語彙研究の成果を縦横に利用した。一例を挙げれ

ば、「吉野讃歌」の結句「水激つ 滝の都」のタギツについて、「タギは激流を意味する言葉で、川の靈威がもっともよく現れる場所である。その激流の地にあえて宮を造営した持統は、自然の威力をも制圧・支配する偉大な帝王として称えられたことになる」(57頁)と述べたような箇所がそれにあたる。また、この書では、謎の歌集とされる「柿本朝臣人麻呂歌集」について、これまでの研究史への反省を迫るような試論を提示した。詳細は本書について見られたいが、すでに「本書においてとりわけ重要な提言が示された部分ではないかという印象であった」とする書評(高松寿夫氏、『日本歴史』80号)があることを記しておく。

(3)同じく、高橋虫麻呂・山部赤人の語彙研究を基本とした『高橋虫麻呂・山部赤人』(日本歌人選、笠間書院)を完成させたこと。これが第三の成果になるが、これもその一例を挙げるならば、高橋虫麻呂の珠名娘の歌の「その姿の 端正しきに」とあるキラキラシについて、「光り輝く理想の美しさを示す言葉だが、もともとは神女すなわち巫女の属性を意味した」として、娘子が多くの男と通ずることの意味を明らかにしたこと(11頁)などがそれにあたる。この書は、すでに校了済みであり、本年9月の刊行が予定されている。

(4)山上憶良の独自の語彙を分析することで、『万葉集』における歌人憶良の独自性を定位しえたこと。これは、歌誌『礫』の連載として公表中だが、つとに高木市之助が、「孤語」と名づけた、他に類例のない独自の語彙が顕著に見られる。そのことごとくが、対象への讃美を本質とする和歌の表現にはそぐわない否定的な意味合いをもつ言葉であるところから、それらの言葉を使用した憶良の和歌が、『万葉集』の表現世界の中に、いわば「一つの極北」としての位置を占めていることを実証的にあき

らかにした。

(5) 『万葉集』の語彙との比較から進めた『古事記』の歌謡研究を、『古事記』全体の新たな注釈ないし評釈に結実させ、その完成をほぼ見つつあること。この事情についても上記「研究の方法」に記したとおりだが、これが完成・公刊されたあかつきには、従来の『古事記』研究とは異なる視点からの成果として、とりわけ語誌的、表現史的視点から『古事記』の表現を読み解いたものとして、内外に大きなインパクトをもたらすものと信じている。

なお、NHK ラジオを通じて、研究成果の一端を広範な視聴者に届けえたこともここに特筆しておきたい。

最後に、国内外の研究へのインパクトだが、本研究の全体について述べるなら、一つ一つの表現の背後にある世界像を検討しながら、いわば表現史的な視点に立って、『万葉集』の全体を見渡す作業を、さまざまなかたちでひとまずまとめえたことは、将来の『万葉集辞典』の完成への大きな礎を築いたという意味でも自負するところがあり、この成果は同様の研究者にも有益な意味をもたらすことができるものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

多田一臣、大三輪高市麻呂と伊勢行幸、大美和、依頼原稿、129号、2015、pp.35-40

多田一臣、『玉葉集』の再評価と『万葉集』、和歌文学大系、依頼原稿、月報43、2016、pp.1-4

多田一臣、伝承の恋 ウナヒヲトメについて、『恋する人文学』(翰林書房)、依頼原稿、2016、pp.7-19

多田一臣、恋のことば、悠久、依頼原稿、145号、2016、pp.25-33

多田一臣、『万葉集』の無常観(一)(二)、

磯、依頼原稿、336、337号、2016、pp.15-18、15-18

多田一臣、『日本霊異記』をどう捉えるか 自土意識(国家意識)の視点から、説話文学研究、依頼原稿、51号、2016、pp.1-10

多田一臣、『万葉集』の季節観、磯、依頼原稿、338号、2016、pp.15-18

多田一臣、古代文学の中の「猫」、同(続)、磯、依頼原稿、339、340号、2017、pp.33-36、13-16

多田一臣、万葉歌人・大伴家持、富山県、依頼原稿、2017、pp.4-33

多田一臣、山上憶良(一)~(六)、磯、依頼原稿、341-346号、2017-2018、pp.15-18(毎号)

多田一臣、引田部の赤猪子について、大美和、依頼原稿、133号、2017、pp.11-24

多田一臣、持統天皇と柿本人麻呂、本郷、依頼原稿、130号、2017、pp.8-10

多田一臣、『神聖喜劇』と『万葉集』、『大西巨人 文学と革命』(翰林書房)、依頼原稿、2018、pp.73-88

多田一臣、大伴家持と『万葉集』の編纂、『歌人大伴家持 現代と響き合う詩心』(高志の国文学館)、依頼原稿、2018、pp.162-169 [学会発表](計3件)

多田一臣、『日本霊異記』をどう捉えるか 自土意識(国家意識)の視点から、説話文学学会大会、2015

多田一臣、『神聖喜劇』と『万葉集』、二松学舎大学東アジア学術総合研究所ワークショップ、2017

多田一臣、大伴家持の孤独 巻二十を中心に、上代文学会秋季大会、2017

[図書](計2件)

多田一臣、吉川弘文館、柿本人麻呂(人物叢書288)、2017、244頁

多田一臣、笠間書院、高橋虫麻呂・山部赤人(日本詩人選61)、2018(予定)、120頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

放送等

多田一臣、万葉語の由来をさぐる、私の日本語辞典（NHK ラジオ第二放送）、2015年10月3、10、17、24、31日（21時～21時30分）*聞き手 秋山和平アナウンサー

6．研究組織

(1)研究代表者

多田一臣（TADA,Kazuomi）

二松学舎大学・文学部・特別招聘教授

研究者番号：50092268

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）

研究者番号：

(4)研究協力者

（ ）